

## — 鉄鋼ニュース —

## 昨年度の鉄鋼生産

日本鉄鋼連盟の生産実績速報によると、昨33年度(昨年4月から今年3月まで)の鉄鋼生産は、銑鉄、粗鋼、普通鋼熱間圧延鋼材ともそろって好調で、いずれも年度間生産として最高の新記録をたてた。とくに銑鉄の増産は大きく、前年度を11.2%上回った。また粗鋼は32年度より3.8%増、普通鋼熱間圧延鋼材は3.3%増といずれも増産した。粗鋼では転炉による生産が前年度より64%もふえたのが注目される。主な内訳はつぎの通り、(単位1,000t, カッコ内は32年度実績)

銑鉄	7,671 (6,900)
粗鋼	12,771 (12,309)
普通鋼熱間圧延鋼材	8,989 (8,703)
特殊鋼熱間圧延鋼材	564 (570)

(4. 12朝日)

## 250万tの出鉄記録

八幡製鉄洞岡第4高炉(1,000t)は、さる3月25日で250万tの出鉄をなしたが、この記録は日本で初めてであり、炉況も好調に操業を続けているので、300万tの記録をも打ち樹てるのではないかと期待されている。

この高炉は、さる昭和27年12月1日に火入れされたもので、さる3月25日までの操業日数は2,306日、平均出鉄1,081t、平均コークス比702kgという優秀な成績を収めているが、この優秀な成績を収め得た原因としては、(1)27年頃のわが国の煉瓦が非常に品質が良くなった。(2)技術の上昇、(3)高炉土手にカーボン煉瓦を使用したことなどを挙げることができる。

なおアメリカにおいては過去350万tの出鉄をしたものが記録となつているが、同国の場合1,000t高炉で大凡200万t近い出鉄で止つているため、今回の洞岡の高炉は、米国の平均レベルをはるかに超えた出鉄をみたわけである。

(4. 1鉄鋼界報)

## 戸畑に純酸素転炉工場

八幡製鉄所では、戸畑地区にわが国最大の純酸素転炉工場を建設中であるが、すでに炉体本体の据付を終り、8月末完成を目標に工事は急ピッチで進められている。この工場には1回出鋼能力60tの純酸素転炉2基が設備されるが、炉体、傾動装置および付帯設備はドイツ、デマーグ社から輸入されている。炉体の特徴は炉底部分を取りはずしできることで、修理作業が簡単におこなえる。混鉄炉は容量1,350tで日本最大、また転炉から発生する廃ガスの熱を回収して発電および1,500t高炉のプロアー用として利用することになつている。収塵装置はオーストリア、ワグナー社からの輸入品で、このほか副原料装入設備、各種クレーンなどが設置される。なお転炉は将来3基増設される予定。

(4. 11日刊工業)

## 鋼管鶴見の気体酸素吹込み

日本鋼管鶴見製鉄所では、4月1日から高炉と平炉に気体酸素を吹込み銑鉄の増産をはかっているが、平炉では約10%の出鋼の増加となり、予定どおりの成果を挙げている。

同所では1日から高純度の気体酸素を平炉に毎時1,000m<sup>3</sup>、高炉に同1,000m<sup>3</sup>ずつ合計2000m<sup>3</sup>を吹込む計画であつたが、高炉ではストの影響、炉内状況などから現在毎時約600m<sup>3</sup>の酸素しか吹込んでいないが、それでも吹込み前までは日産約530tぐらいであつたものが、10日から16日までの平均出鉄量をみても546tと約16tの増産となつており、毎時1,000m<sup>3</sup>の酸素を吹込めば1日の出鉄量は590tになると推定される。また平炉では現在すでに毎時1,000m<sup>3</sup>の吹込み実施中で、小型平炉ではそれまで1日4.5チャージであつたものが、4.9チャージ、同大型では3.6チャージであつたものが4.0チャージと製鋼時間が短縮されている。したがって1日の出鋼量も増加してくるわけで小型で280tあつたものが310t、大型で440tであつたものが490tと平均して約10%の増産となつている。

(4. 22日刊工業)

## 豪州で原料炭を開発

三井物産、三井鉱山の両社は、豪州での原料炭の開発を考え、2月以来現地に技術者を派遣して、クインズランド州キャンカ地帯、ニューサウスウェールズ州グレンリイ地帯の2炭田について地質調査を進めていたが、この程調査団の帰国で両地区とも埋蔵量に恵まれ、品質もよく、開発が有望であることがわかつた。このため両社は6月ごろさらに第2陣の調査団を派遣し、三井グループとして開発に乗出すかどうかのメドをつける本格的調査を実施することになつた。この開発計画が実現すれば近距離地域に製鉄用原料炭の安定した供給源を持ちたいという製鉄業界の希望にかなうことになるので、今後の調査の成果が期待されている。

(4. 21日経)

## 本多記念賞の受賞者決定

本多光太郎博士の偉業を永遠に記念するために設立された財団法人本多記念会では、理工学特に金属に関する基礎および応用研究を行つて卓抜な貢献をした者に対し本多記念賞および副賞を贈呈してこれを表彰することになつたが、このたびその第1回の受賞者は東北大学名誉教授理学博士村上武次郎氏に決定、その贈呈式が5月25日午後1時読売会館において挙行される。同日は贈呈式終了後記念講演会が開催され、素粒子とは何か一湯川秀樹氏、日本鉄鋼業の現状と将来対策としての資源政策一永野重雄氏、科学技術の進歩とその社会的影響一茅誠司氏の諸講演が行われる予定である。